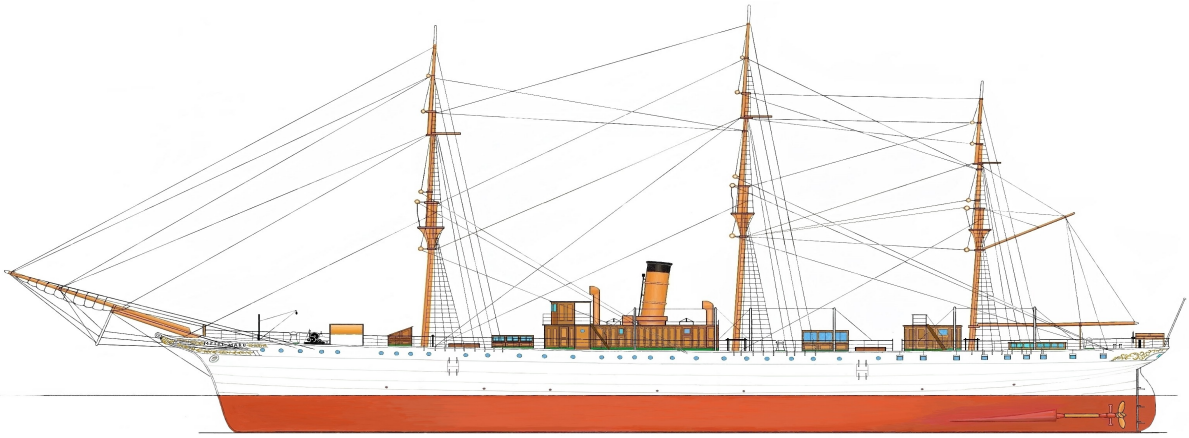
Ocean

海洋塾機関誌第7号



平成29年8月8日

特定非営利活動法人 日本海洋塾
日本海洋塾は、世界を結ぶ海と船を、広く皆様に伝える活動により、海洋立国意識の拡充を目指しています。

§平成28年度活動報告＆29年度活動計画§

活動報告

1、事業環境

当年度は、事務所設営、活動環境の整備などの準備作業に追われた前年度から、一応安定した運営体制に移行した初めての年度となった。年度初めに新しく理事1名が加わって新体制となった。

平成 27 年 11 月から再開した重要文化財「明治丸」の船内一般公開も、来船者が増加し、百周年記念資料館隣り（清澄通り寄り）に建築中であった「明治丸記念館」も、平成 28 年 3 月に完工し、7 月 18 日の海の日には完工披露式、一般公開が始まった。

このような状況から、昨年度に引き続き、通年で「明治丸」の船内保守業務、年末や桜まつりの期間のライトアップ業務を請負う等、「明治丸」との関わりを持つことができた。 また、外部に向かっての情報発信を担うホームページの充実、会員相互の交流の場としての機関誌「Ocean」の発行など、当塾の活動の、内容も幅も広がり、やっと活動を軌道にのせることができた 1 年であった。

2、事業別活動状況

（1）海事思想啓発事業

（活動の公開、海事情報の紹介などを目的に、ホームページの運営、機関誌の発行等の活動）

① ホームページの内容、構成を更に充実するとともに、明治丸海事ミュージアムとの連携を図るなど、情報交換・発信の場として活用できるものとした。

② 機関誌「Ocean」を会員向けに 4～6 号を発行した。

（2）海事意識教育事業

（セミナーなどを通じて、海と船に関する知識、経験などを周知拡大する活動）

① 海事普及会と共催として、平成 29 年 4 月開催を目標に、周辺小学校の学童を対象にした「プラネタリウム見学会」に合わせ「天文学と航海学の講演会」を準備した。（既に、平成 29 年 4 月 23 日に実施済み）

② 昨年に引き続き、江東区設立の江東区観光協会と連携し、「深川さくらまつり」期間中に実施された「まちあるきツアー・明治丸と桜めぐり」の引率者・江東区文化観光ガイドを対象に、「明治丸」をはじめとする学内文化財についての研修会を実施した。

③ 羽田少年航空団（約 30 名）の「明治丸の見学会」を、要請により実施した。

（3）海事文化財利活用促進事業

（明治丸を初めとする海事文化財の公開などの利用、活用を促進する活動）

① 昨年度に引き続き、年末および桜まつりの期間、「明治丸」のライトアップを大学から請負い、実施した。（当塾は、照明設備の用意、点灯管理、後始末を担当、当期中 17 日）

② 一般会員からの提案で、視覚障碍者を対象にした「明治丸タッチングツアー」を検討・企画した。 実施計画立案の為に、「学生祭」の時に、実際に視覚障碍者に来て頂き、簡単なトライアルを実施した。

（4）海事文化財整備保全事業

前年度に引き続き、「明治丸」内部（上甲板構造物・中甲板全般・船艙全般）の清掃・機器の保守などの一般業務を大学から請負い、実施した。 併せて、大掃除を一般会員の協力参加を得て実施、中甲

板の床、壁面などの清掃ができた。

（5）物品販売事業

① 当塾の広報と明治丸修復の周知を目的に作成した、寮歌 CD 復刻版と「明治丸」デザインの缶バッジ No001 は完売したので、新たに「明治丸」デザインの缶バッジ No002 & 003 を作成し販売中。

② 平成 28 年 9 月 30 日、海洋会ボランティクラブ・明治丸グループが管理・販売していた、明治丸観覧記念品（マグカップ、小皿、大皿）が、海洋会ボランティクラブから当塾に寄付された。これに伴い、これらの物品を「明治丸広報関連グッズ」（略称：明治丸グッズ）として受領し、その学内での販売を海洋会ボランティアクラブに委託した。

3、決算概要

平成 28 年度決算（第 3 号議案資料ご参照）については、明治丸保全事業を通年で請負ったこと、特別の寄附金収入があったこと等を鑑み、事務所什器等を整備したことから、事業活動の当期経常は▲104 千円を計上、これに都税の均等割り 70 千円の支払いが加わり、174 千円の財産減となり、正味財産は 735 千円に減少となった。

活動計画

1. 事業環境

平成２９年度は、修復、改修工事が終了した「明治丸」、「百周年記念資料館」、更には、新設の「明治丸記念館」、等の諸設備の体制が整い、それら諸施設のより一層の利用・活用が求められる年となった。 従来どおり、両資料館内の展示物、展示方法、等々、利用・活用に関する各種提言を積極的に行い、「明治丸海事ミュージアム」との協力関係を一層強化し、当塾の事業を拡充していく必要がある。

「明治丸」については、修復工事完了から3年目を迎え、点検を要する個所が増加することが予想され、平成２８年度のような、単なる「中甲板以下の船内・艙内清掃、艙内一部機器の清掃・整備」の請負いではなく、「明治丸」全般の保全、維持・管理、利用・活用、への協力度合いを一層深めるべく、大学側と鋭意交渉する必要が生じそうである。

一方、一般市民に対する海事思想の普及に関しては、外部の観光協会等との協力関係を一層発展させると共に、大学内の関係先とも協力関係を維持すると共に、江東区や大学周辺の学校等との関係を構築し、公共の場での各種事業を展開させる必要があると考える。

2. 事業計画

上記の如き状況に鑑み、平成 29 年度は活動の機会を一層広げる為に、各種補助金申請の検討、海普会との更なる共催の検討、海事意識の普及に関する独自プログラムの検討、外部団体との協力関係の一層の構築、等々、種々の企画を立案、実施する年としたい。

現時点で、考えている活動（案）は以下のとおり。

（1） 海事思想啓発事業

引き続き、ホームページの掲載内容の充実を図るとともに、会員相互や、海事に興味を持つ一般市民との交流の場の設定を検討する等、ホームページの新しい機能の拡充を検討することとしたい。会員の皆様のご協力の下、機関誌「Ocean」の品質（体裁、

内容とも）の一層の向上に努めることとしたい。

（2） 海事意識教育事業

海事意識教育の目的で、当塾としては、例えば、以下に示すような大学内・外の種々の組織に働き掛け、「明治丸」、「百周年記念資料館」及び「明治丸記念資料館（仮称）」への来訪者を増やすことに協力したい。

A）「海事普及会」との協力関係の更なる発展を図る。

既に、平成29年4月に、深川小学校の学童を対象に、昨年度に、海普会による「プラネタリウム見学会」と当塾による「星の動き」に関する講義の組合せの催しを行った。 今後共、「プラネタリウム」と「明治丸」の組合せによる活動を強化するよう、海普会に協力しつつ、指導していきたい。

B）「海洋会越中島支部」活動への協力を強化する。

引き続き、支部活動として、准員（在学生）への海洋会の活動 PR に協力すると同時に、当塾の PR も行い、会員勧誘に努めることとしたい。

C）「大学周辺の学校」へのアプローチを拡大したい。

海洋大学の周辺には、小・中・高と各種学校が存在している。 出来れば大学の支援を得て、江東区（場合によっては対岸の中央区も含め）の教育委員会等に働き掛けを行いたい。

夏休みを利用した「海洋教室（仮称）」の開催など、地域の学校への訪問（或は大学にて）による海事知識の普及活動を行うこととしたい。

D）「公益社団法人　日本海洋少年団連盟」（以下　海洋少年団）へのアプローチ

全国88単位団体　約3，800名の会員が参加。

東京地区連盟には、深沢団、目白台団、大田区団、千代田区団、杉並団、葛飾団、港区団、の7団があり、HP 等で見る限り、4年前に結成された「港区団」でも会員は25名程度と、余り活発に活動しているようには見えない。

すでに、海洋大学においては、カッターの係留場所を提供するなどの協力をしているが、当塾としては、海事知識の普及を考えるとき、少年少女の将来に期待するところ大であり、海洋少年団と何らかの繋がりを持つことが重要と考える。

地元である江東区での海洋少年団結成の可能性を探ってみたい。

F） 近隣の「観光協会」 等との協力関係の構築

重要文化財「明治丸」の当面の管轄官庁である江東区は勿論、出来れば隅田川対岸の中央区を含めた「観光協会」との協力関係の構築により、「明治丸」をはじめとする歴史的資産への、一般の人の注意を喚起し、来訪者を増やす努力をする。

現に、「明治丸」のライトアップ実施後、対岸の中央区民が「明治丸」の見学に多数訪れているし、江東区観光協会とは、「明治丸」訪問を主とした「まちあるきツアー」の企画、（6 日間、各日40名参加）に協力した実績もある。

（3） 利活用促進事業

A）「日本盲人会連合」（視覚障害者の組織　加盟団体 61 団体　会員約　50,000 人）との協同事業として以下のことを考えたい。

ソルティーフレンドの代表であり、当塾の会員でもある、高橋女史よりの提案。

視覚障害者に、「船」について知ってもらう為、通常は船舶模型を触って、「船」の形等を理解してもらうが、どうしても実物の手触り感、「船」の大きさの実感、等というような実物感が不足する。「船の科学館」の展示船である「宗谷」に乗船して船内から船体を「触る」ツアーを実施しているが、船内からでは船の大きさが分からない。

一方、「明治丸」は古い船とは言え、陸上保管であり、容易に実船に触れることが出来るので、これを教材にした「タッチングツアー」を実施してどうかとの提案。

重要文化財「明治丸」を教材とした社会貢献としての視覚障害者の為のツアーであり、案内人（ガイド）の事前講習などの手間はかかるが、長く続けられる事業として是非とも実現したい。

既に、文京区視覚障碍者福祉協議会の副会長他の方々に来て頂き、トライアルツアーを実施したところ、大変好評であったと、と同時に、実施に際してのガイド側の準備などの問題点も判明した。

当塾としては、初めてのことでもあり、慎重な準備期間を考慮し、本年度は気候の良い初夏、初秋の2回程度（休館日に各回 10名+付き添い 10名程度）を実施することで計画したい。

B)「ザ・ロープ」（通称　ロープの会：　木製帆船模型製同好会　会員 110 名）との関係強化を図りたい。

2015 年に創立 40 周年を迎えた、木製帆船模型界の由緒ある同好会で、毎年、製作した模型の展示会を行っており、多い時で約 8,000 名、最近は 4,000～3,000 名の愛好家が、1 週間の展示会の足を運ぶ程の盛況ぶりである。

既に、田中会長とは面識あり、「明治丸」又は新設の「明治丸記念館」、その他の大学の施設の利用について話をし、来年度に「全国帆船模型同好会協議会」（ザ・ロープをはじめ、全国１７の同好会が参加）の展示会を開催できるかの打診がきている。

当塾としては、できれば、特別展示等の企画に加えることを提案し、帆船模型の展示企画への会見学者を誘致し、同時に「明治丸」の存在を一層アピールすることにより、「明治丸」及び「資料館」を訪れる人数の増加が期待できるものと考える。

C)「明治丸海事ミュージアム」との協力関係強化

上記 A)、B) 記載の外部団体とのコラボは、「明治丸」及び「百周年記念資料館」等の明治丸海事ミュージアム所属の施設を利用・活用するものであり、これらの企画については、明治丸海事ミュージアムとの協力関係が、不可欠であり、大前提になっていることは、言を俟たない。

今後は、「百周年記念資料館」内の展示物について、現在の、「動かない、動かせない」資料から、出来る限り「動かせる、動く」資料への転換を図り、魅力ある資料館に変身する工夫を提案し、実現していきたい。

ライトアップの実施については、適時に提案し当塾が請負い実施すべく、引き続き提案していきたい。

D)「江東区協働事業提案制度」への応募

江東区が毎年募集する、補助金を受けられる「江東区協働事業提案制度」に応募し

てみたい。

江東区内の NPO 等と江東区との江協働事業を募集している。当塾としては、「海・船・天文」と云った海洋塾特有の分野、「明治丸」と云う重要文化財、等を活用して、東区民の為になる協働事業を検討し、応募してみたい。

今年、提案が採用されなかったとしても、江東区役所や、江東区内の NPO などの動きを知り、新しく人脈を築ける発端となると考える。

（4） 整備保全事業

管理者である大学は、日々変化していく船体の状況を、具に観察・記録し、問題個所を把握し適時、適切な処置を講ずる必要があることは明白であり、重要文化財の所有者としては当然の義務でもある。

単なる「中甲板以下の船内・艙内清掃、艙内一部機器の清掃・整備」のみではなく、「明治丸」全般の保全、維持・管理、利用・活用、についての協力度合いを一層深めるべく、大学側と鋭意交渉する。

（5） 物品販売事業（利活用促進事業）

「明治丸」に代表される、明治丸海事ミュージアムに利活用促進（PR）と、当塾の PR を兼ねた広報関連物品の販売事業は引き続き継続したいと考えている。

好評の缶バッジの「明治丸 Series2 & 3」は、在庫の状況を見ながら、新しく別のデザインのものを追加販売するか否かを検討したい。

海洋会ボランティアクラブから寄付を受けた、「明治丸広報関連グッズ（大皿、小皿、マグカップ）」の販売促進に努めたい。

その他にも適当な物があれば適時追加を検討していきたい。

以上

§水クラゲ　（水海月）§　　正会員　小島　　茂

机の上のビンの中で、白い透きとおったクラゲが二匹、ワコッワコッと泳いでいる。
一月、第二日曜日の十五日、小田急線、江の島駅から歩く。江の島の橋から見る夕焼け、雪をかぶった富士山。皆、写真を撮っている。渡りきって、鳥居をくぐる。両側にある土産物屋、湯気をだした饅頭屋、蛸煎餅屋、海鮮食堂を見ながら上る。コルク銃の射的屋はなくなっていた。神社への階段下の左側、「春巳商店」の店先に、今まで見たことのない、ガラスの丸いビンが、二段の棚に、野球のソフトボールのように、五個ずつ並べて置いてあった。「江ノ島ペットクラゲ」―みずくらげの赤ちゃん―ふたのラベルに書かれていた。
店番のおばさんに、「これ本当のクラゲが、入っているの」と聞くと。「そう、本物だよ、元気いいよ、えさをやると、ずうっと生きてるよ」
　ビンを手に取ってよく見ると、三センチぐらいのクラゲが、二匹泳いでいる。凸レンズの作用で大きく見える。「どのくらい生きてるの、それと、えさは何」「二、三年は大丈夫。海水を二週間毎に替えるの。えさは、海老の小さなたまご。水道水にこの袋の粉を溶かすと、海水がつくれるの」「へー、それで、いくら」「一ビン、二匹入って千円。この粉と、えさの袋で五百円」
ちよっと考えたが、面白そうなので、「うーん、一つください」「どれも元気いいよ、選んで」
ビンをビニール袋にいれてもらう。江の島神社にお参りし、家に帰る。
　ビンを上下にひっくり返したり、蛍光灯にかかげて見たりした。元気よく傘を動かしている。寝る前に、ビンのふたを開け、茶色のえさを親指と人差指で、ぱらぱらと入れと、幾分か、ワコッワコッが早くなる。翌朝見ると、食べすぎか、動きが鈍い。二日酔いの自分のようである。
一方、真面目に考えると、こうした生き物が、船のバラスト水で運ばれ、環境問題になるのだなと納得した。
水クラゲ（水海月）は、英語で、Moon Jellyfish とある。知らなかった。ともに「月」が入る。
クラゲに関連して思い出す。四十二年前、実習生で乗った練習船「海王丸」。サンディエゴを出港、カリフォルニア沖を離れて、貿易風にのる前日、弱風の状態の午後だった。海面に、白っぽい小さなきらきらと光るものが、一面に浮いて、流れている。通常の海面の反射とは違っていた。
当直の二等航海士が、「帆立クラゲだよ」と言う。甲板から早速、ひも付きのネットを海にたらし、掬う。三角形の帆を張った、直径四センチから五センチの円形のクラゲが何匹かとれた。
二等航海士が説明する。
「このクラゲは、一匹でなく何匹かが、くっ付いて一体化、個々が異なる機能を分担している。つまり帆の部分、船体の部分、プランクトンを食べる部分、子作りの部分等だ。英語の名前は『By the Wind Sailor』、つまり『風まかせの水夫』。帆の右開き、左開きで、北西風が得意なものと、南東風を得意とするものとがあるようだ。昔の帆船乗りが、付けた名前だ」「ふーん、偉いもんだ」。
　帰宅すると、水クラゲ、うれしいのか、ワコッワコッが、早くなった。
（参考）その後、水クラゲは一ヵ月ほどで、永眠した。
（注）本文は四年前作成、現在、「春巳商店」では、水クラゲは扱っていない。残念

§フィリピンにて§

正会員　**小島　　茂**

　次の詩は、フィリピンがスペインからの独立を目指したときの英雄ホセ・リサールが、処刑される数時間前に書いたものです。ULTIMO ADIOS（最後の決別）の最初と最後のところです。独房のランプの中に隠され、あとで家族が見つけました。

＊＊

　さうなら　なつかしい祖国よ
　太陽に抱かれた地よ
　東の海の真珠よ
　失われたエデンの園よ　！
　いまわたしは喜んできみに捧げよう
　この衰えた命の最もよいものを
　いや生命そのものを捧げよう
　さらに栄光と生気の祝福が待っているなら
　何をおしむことがあろう
・　・・・・・・・・・・・・　・・・・・・・・・・・・
　私は感謝しよう
　ものうい日々から免れたことを　！
　さようなら私の道をてらしてくれたやさしいひとよ
　すべて愛するものたちよ
　さようなら死の休息が待っているのだ

（加瀬正次郎訳）

＊＊

一八九六年十二月三十日、マニラで銃処刑され、現在その場所には像が立ち、
リサール公園となっています。三十五歳でした。
　彼はマニラのサント・トーマス大学（フィリピンで一番古い大学）で医学と詩、哲学を学び二十一歳でスペインへ留学、その後ヨーロッパ、日本にも旅をしました。語学も堪能で、また眼科医のかたわら学校も創りました。この詩の
“やさしいひとよ”のところは dulce extrangera,mi amiga,mi alegria　とあり、この extrangera（異邦の人）は日本にいた時の恋人“おせいさん”をさすといわれています。
　彼が処刑されるまでの二ヶ月間、幽閉されたところはリサール記念館として
マニラ、イントラムロス（スペイン語で壁の内の街）のサンチャゴ要塞の一画にあります。またこのリサールさんの胸像は日比谷公園にもあります。日比谷花壇（花屋さん）から交差点に向う道路沿いの小道に建てられています。とてもハンサムです。
　彼はマニラの南、ラグナ郡のカランバで中国系の中流階級の家に生まれてい
ます。スペイン統治の間、多くの中国人、殆んどが福建省から出稼ぎに来て、フィリピンの女性と結婚し、キリスト教に改宗、現地になじみ貿易関係等の

いろいろな仕事についたそうです。世界の国での純血を守る華僑とは異なっているのかと思います。昔も現在同様フィリピンの女性は魅力的だったのでしょう。前大統領の母、一九八八年民衆から選ばれた元大統領コラソン・アキノさんも中国系です。リサールの民族主義運動が今にもつづいていると言っていいと思います。

私は一九九四年～一九九六年にかけてマニラのマンニング会社に駐在していました。何度も訪れたイントラムロスにはサンチャゴ要塞のほかマニラ聖堂、サン・アウグスチヌス教会、カーサマニラ（商館）と、スペイン風の古い家並が改装されそのまま保存され、オフィスとして利用されている建物もあります。日本のＮ社、フィリピンの海員組合もこの中にあります。

サンチャゴ要塞はフィリピンの歴史とともにあった、といってもよいでしょう。スペイン統治時代の石造りの要塞です。スペインとイギリス、スペインとアメリカ、アメリカと日本の戦いにも利用されました。地下牢も残っています。
フィリピンは七千近くもある島でできています。一五二二年マゼラン隊が来る前にはムスリムのフィリピン人達には国家意識はそんなになかったでしょう。マゼランのあとレガスピー隊が一五六五年スペイン領であった、メキシコ、アカプルコから派兵された。セブ島に上陸、その後パナイ島、ルソン島のマニラへと進み、一五七一年マニラを陥落させました。

リサールが処刑された二年後の一八九八年までの三百三十三年間スペインに支配されていました。大航海時代のあと、メキシコからの統治がつづいたわけです。
カソリック布教を旗印にして宣教師と兵隊にて中南米、南米、メキシコを次々に征服してきました。スペインは非常に少ない人口でどうしてあれだけ広いエリアを支配できたのでしょう。
日本にもサンフェリッペ号等のガレオン船が漂着、および来航してきました。
日本の歴史にも大きな影響を残しました。キリスト教に帰依した日本人は十五万人ちかくなり南蛮寺も二百を数えたとの資料もあるそうです。

そもそも大航海時代はマルコポーロの東方見聞録に記された黄金の国ジバングがはじまりでした。支倉常長のローマへの旅でアカプルコまで乗った船バチスタ号は伊達藩により建造されています。（城山三郎著「望郷のとき」に書かれています。）

信長、秀吉、家康のキリスト教への対応、貿易の話もいろいろな本に出てきます。キリシタン大名高山右近は一六一五年家康のキリシタン禁令により長崎からマニラに渡りました。大変な歓待を受けたとの記録があるそうです。しかし疲れと暑さにより四十日後に亡くなりました。マニラ地区にあるパコ駅のそばに右近の像が立っています。当時三千人の日本人が住んでいたといいます。
カーサマニラ、サンオーガチヌス寺院もゆっくり見てまわると時代を忘れます。カーサマニラの台所に昔の氷冷庫が展示されています。十九世紀後半フリッパー船がアメリカ東岸ボ

ストンから氷を運び商館に配っていたとメモにありました。
　マカテ地区にフィリピン各地の踊りを見せるレストランがあります。その踊りのなかで若い男女二人が向き合ってのリズミカルなものは、まさにロスアンゼルスでマリアッチとともに見た踊りと全く同じでした。広い太平洋をへだててはいるものの、文化はカリフォルニアとマニラはほんの近いところにあったわけです。
　ガレオン船が往来した当時すでにフェルナンド、ロペス、ガルシア等の名の付いたフィリピン人クルー達が活躍していたことでしょう。
　彼らのふるさとの小さな島で、のんびり泳ぎ、ニッパ椰子でできた日よけの下での午後はとても気持ちよく、肌に風の存在をしっかり感じ、また日が沈んだあとの空の色は刻々と変わります。夜空の星の量は船から見るのと同じですが一つ一つが大きくはっきりしています。
　時は過ぎていきます、ゆっくりと動き、それは歴史となります。フィリピンを見ていくことにより日本の歴史、世界の歴史の一部に触れることが出来ました。日米の戦争はあまりにも激し過ぎました。大岡昇平著　野火、レイテ戦記にも著わされています。しかし、しっかり記憶に残さなくてはなりません。
　マッカーサーの有名な言葉「アイ・シャル・リターン」を残したコレヒドール島の地下要塞、死の行進のバターン半島サマット山に立つ百メートルを超す慰霊の十字架は、是非おとずれて欲しいところです。
　マニラからほど遠くないルバング島には三十年間も小野田さん達は隠れ住んでいました。一九九一年のピナッボ山の爆発は、ベトナム戦争の時、重要な拠点だったクラーク空軍基地を簡単に撤去に追い込みました。

　現在の日本の外航商船隊二千六百隻を動かしている船員は八万人、九十七パーセントは外国人船員です。その七十パーセントの五万四千人がフィリピン人船員です。彼らはとてもよく働きます、そしてしっかり給料を本国の家族に送金しています。日本の貿易は彼らフィリピン人なくしては成り立たないのです。日本はフィリピンとしっかり手を組んでいかなければなりません。
　マブハイ！　「よろしく！」

§寮歌「白菊の歌」と寮歌消滅の危機§　　正会員　佐藤勝二郎

昔から歌い継がれている寮歌「白菊の歌」は、商船学校で学ぶ生徒の姿を演歌師・神長瞭月（1888～1976）が書生節の一つとして、明治 37 年に作詞作曲したものである。

明治・大正に流行して、今 70 歳代の世代の人の親たちが、昔聴いて歌ったことがあるという話を聞いている。

いつの間にか、高等商船学校の寮歌となり高等商船学校、東京商船大学の OB で、この歌を知らないものはいない。

しかし、全寮制が廃止され女子学生が増加している東京海洋大学となった今では、寮歌を歌う機会が少なくなり、やがては消滅するのではないかと憂慮している

寮歌絶滅の危機を憂う OB たちは新寮生に寮歌指導を行なったり、寮歌を歌う会を開催して復活を図っている。

海洋会ボランティアクラブが行っている、新寮生に対する寮歌指導の際に、学生が持ってくる寮歌の歌詞が年度により異なることがあるので、指導する側は当惑している。

そこで、「白菊の歌」の歌詞がどのように異なっているのか調べてみようと思い立ち、資料として下記の A、B、C を選び歌詞の比較表を作った。

資料 A　原本不明の歌集 55 ページ

海の歌、船の歌の歌集がいろいろと刊行され市販されておりましたが、手元にはありませんので、原本不明としております。

この歌詞が一番多く歌われており、レコード会社から発売されている寮歌の CD（ﾎﾞﾆｰｼﾞｬｯｸｽ、三鷹淳）でも、この歌詞であります。

資料 B　海洋会発刊の「檣濤歌集」

海洋会が平成 6 年編纂、平成 26 年に刊行された「檣濤歌集」には多数の寮歌・船歌・校歌が収集されており、寮歌・船歌の宝庫と言えるものです。図 1 参照。

収集されている「白菊の歌」の歌詞は、東京海洋大学の「百周年記念資料館」にある SP レコードから聴き書きされたものです。

演歌師の唄であるのでメロディーが現在のものと異なっています。 レコードラベルには、書生節・商船学校寮歌、唄・松尾清、ヴァイオリン・小林暁風、ピアノ・鈴木順四郎、電機吹込、トンボ印日本レコード、15316-A と記載されています。

図 2 参照。

図1

図 2

図 3

資料 C　SP レコードの寮歌・霞める空

インターネットの「You Tube」にある SP レコードから聴き書きをしました。

演歌師の歌であるのでメロディーが現在のものと異なっています。

レコードラベルには、寮歌（商船学校の歌）、霞める空、唄・君塚愛子（前半）、唄・松尾清（後半）、電機吹込、トンボ印日本レコード、S347-B と記載されています。図 3 参照。

製造番号（？）S347-B から、資料 B より古いものと推定できます。

それぞれの歌詞で、お互いに異なるところを**赤字**で強調してあるので、ご覧になればわかるように、いわゆる「て・に・お・は」の違いばかりでなく、表現が異なり意味が真逆のところがある。

まずは、3 番の A「ああ父母は今いずこ、吾が恋人は今いかに」である。常識的には父母が行方知れずになることは考えられず、遠くの恋人が音信不通になることのほうが多いと思うので、父母や恋人を思いやる表現としては「ああ父母は今いかに、吾が恋人は今いずこ」との B・C の歌詞のほうが正しいのではないだろうか。

同じ 3 番で、A と B で最後の「少年左手に持つものは」が、C では「少年右手に持つものは」と『左・右』が逆転している。

6 番で A が「彼が形見を思い出で」が、B・C では「君が形見と思いなば」となり、『彼』とは少年のことだろうから、今歌われている A は間違っているのではないかと思うのである。

9 番においては A「雲無く月は澄み」と B「隈無く澄み渡り」と C「隈なく澄き渡り」とみな違い、A「夜中の空とおく」と B「月の空高く」と C「夕べの空高く」とこれまたみな違うのである。

10 番の三行目 A「忽ち消ゆる」が B・C では「再び立ちし」と表現が全く異なり、四行目は A「遠く」が B・C では「近し」と全く逆の表現となっている。

11 番の A「小松原」が B・C「小松が浜」と表現が違っているのである。

歌詞が変遷する理由は、録音機やコピー機のない時代の聞き違い、写し間違いや、演歌師が勝手に変えてしまったのではないだろうか。演歌師・松尾清でも盤によっては微妙に違っているのである。

寮歌の歌詞の変遷は、「白菊の歌」以外にも有り、また、いずれの学校の寮歌でもあると思う。インターネットで旧三高の「琵琶湖周航の歌」でも同様に違いが多数あることが検証されているのを見ることが出来る。 http://sunlake.org/music/biwako/lyric.htm

この他に「白菊の歌」では歌詞の違いばかりでなく、気になるところが他にもある。
その一番は「背広の服」である。筆者たちの学生時代の制服は袖に三つ釦・詰襟服であるので、「白菊の歌」が作成された時代の制服がどのような「背広」であったのか、変遷をいつかは調べてみたいと思っている。

寮歌の衰退を憂慮する筆者としては、カラオケ屋さんで「寮歌」の中に高等商船学校の寮歌「白菊の歌」を発見したときは嬉しかったが、変な背景動画とメロディーで「商船学校」のイメージダウンになるのではないかとがっかりしたものである。

シーマンシップを育んできた「寮歌・船歌」がぞんざいに扱われ、忘れられてしまうのは忍び難く思っていたところ、東京海洋大学の明治丸記念館で企画展「順風満帆・商船教育を支えた明治丸、月島丸、大成丸」が開かれるのを知り、練習船・大成丸からは多数の寮歌・船歌が生まれていることを「展示」する絶好の機会と思い提案しようとしたが、時すでに遅く開催直前で内容が決定されており「展示」には至らなかった。

しかし、来館者に大成丸から生まれた「寮歌・船歌」聴いていただけるように、会場の片隅にCDラジカセとヘッドホンを置かせていただき、来館者が自由に試聴できるようにした。
ゆくゆくは東京海洋大学の「百周年記念資料館」か「明治丸記念館」に恒久的な「寮歌・船歌」を試聴できる常設のコーナーできればと良いのだがと密かに願っている。

「演歌師」
簡単に言えば、明治末から昭和初期にかけて、路上でヴァイオリンやアコーデオンを弾きながら演歌を歌い歌詞本で稼いでいた芸人。
「海洋会」
ごく簡単に言えば、高等商船学校から商船大学を経て海洋大学へと変遷を重ねてきた学校の OB・OG 会です。
企画展「順風満帆・商船教育を支えた明治丸、月島丸、大成丸」
開催期間は平成 29 年 5 月 25 日（木）～9 月 29 日（金）
開館日は東京海洋大学・明治丸海事ミュージアム Tel:03-5245-7360 に確認してください。
入場無料

寮歌「白菊の歌」　歌詞比較表

	資料 A	資料 B	資料 C
1	かすめるみ空に消え残る おぼろ月夜の秋の空 身にしみわたる夕風に 背広の服をなびかせつ	霞める空に消え残る 朧月夜の秋の空 身にしみ渡る夕風に 背広の服を靡かせつ	霞める空に消え残る 朧月夜の秋の空 身にしみ渡る夕風に 背広の服を靡かせつ
2	紅顔可憐な美少年が 商船学校の校内の 練習船のメンマスト トップの上に立ち上がり	紅顔可憐の美少年が 商船学校の校内で 練習船のメンマスト トップの上に立ち上がり	紅顔可憐の美少年が 商船学校の校内の 練習船のメンマスト トップの上に立ち上がり
3	故郷の空を眺めつつ ああ父母は今いずこ わが恋人は今いかに 少年左手に持つものは	故郷の空を眺めつつ ああ父母は今如何に 吾が恋人は今何処 少年左手に持つものは	故郷の空を眺めつつ ああ父母は今いかに 吾が恋人は今いずこ 少年右手に持つものは
4	月の光に照らされて 傍の友に語るよう もとこのものは故郷の 外山のかげに咲き残る	月の光に照らされて かたえの友に告ぐるよう もとこのものは故郷の 外山のかげに咲き残る	月の光に照らされて かたえの友に語るよう もとこのものは故郷の 外山のかげに咲き残る
5	後れ咲きなる白菊を 吾れ故郷を出る時 君が形見と贈られし 真心こめしこの栞	後れ咲きなる白菊の 吾れ故郷を出る時 君が形見に贈りたる 真心こめしこの栞り	後れ咲きなる白菊の 吾れ故郷を出る時 君が形見に贈りたる 真心こめしこの栞り
6	海山遠く隔つとも 彼が形見を思い出で 朝な夕なに眺めつつ 云わんとすれば悲しやな	海山遠く隔つとも 君が形見を思いなば 朝な夕なに眺めつつ 云わんとすれど悲しやな	海山遠く隔つとも 君が形見を思いなば 朝な夕なに眺めつつ 云わんとすれど悲しやな
7	涙のために遮られ そのままトップにうち伏しぬ やがて少年身を起こし 遠き故郷を眺めつつ	涙の為に遮られ そのままトップにうち伏しぬ やがて少年身を起こし 遠き故郷眺めつつ	涙の為に遮られ そのままトップにうち伏しぬ やがて少年身を起こし 遠き故郷眺めつつ
8	男子立志出郷関 学若不成死不帰 去年今夜眺秋月 更心身如大海	男子志を立てて学校に入る 学若し成らずば死すとも帰えらず	
9	満天雲なく月は澄み 風はそよそよ吹きわたる 秋の夜中の空とおく 折しも聞こゆる喇叭の音	満天限無く澄み渡り 風はそよそよ吹きわたる 秋の月の空高く 折しも聞こゆる喇叭の音	満天限無く澄き渡り 風はそよそよ吹きわたる 秋の夕べの空高く 折しも聞こゆる喇叭の音
10	ああこの十時は今鳴りぬ 忽ち消ゆる少年の 姿は校舎に入りにけり 音するものは程遠く	ああこの十時は今鳴りぬ 再び立ちし少年の 姿は校舎に入りにけり 音するものは程近く	ああこの十時は今鳴りぬ 再び立ちし少年の 姿は校舎に入りにけり 音するものは程近く
11	小松原に打ち寄する 岸打つ波の音高く 犬の遠吠えかすかなり 犬の遠吠えかすかなり	小松が浜に打ち寄する 岸打つ波の音高く 犬の遠吠えかすかなり 犬の遠吠えかすかなり	小松が浜に打ち寄する 岸打つ波の音高く 犬の遠吠えかすかなり 犬の遠吠えかすかなり

2008 年（平成 20 年） 2 月 「明治丸　帆装解体工事」 について

正会員　松﨑　光男

2015 年（平成 27 年）3 月に「明治丸」の平成の大修理が完成して、同年 7 月の海の日にお披露目があり、若干の間をおいて一般公開が開始され、現在は、以前以前に比べると多くの見学者が訪れるようになりましたこと、ご同慶の至りです。

さて、皆様ご存じのとおり、平成の大修理に至るまでの道のりは多難な長い道のりでしたが、今回は、小生が現場に居合わせた「明治丸の帆装解体工事」について触れたいと思います。

工事の詳細については、「東京海洋大学（越中島）明治丸修復その他工事　報告書　平成 21 年 3 月」と云う、施工業者である「（株）IHI 造船化工機」による報告書があるので、参照頂きたい。

報告書によれば、工事は 2009 年（平成 21 年）1 月 13 日の工事用仮設物の工事から始まり、3 月 19 日に本船から取り外した部品の仮設格納棚への格納が終了したことになっています。

工事の期間は、丁度、傷みの酷い「明治丸」は、2008 年（平成 20 年）12 月末をもって一般公開が中止され、それに伴い、海洋会ボランティアクラブ明治丸グループ（以下 VC）による船内案内も中止となり、明治丸グループの活動を如何にするかが問題となっていた時期にあたります。

当時は、12 月中旬～2 月中旬までの冬期の百周年記念資料館の一般公開もお休みとしていたこと、及び、大学側から工事が行われるとの話しも無かった為、VC のメンバーの多くはこのような工事が進行しつつあることを承知しておりませんでした。

当時 VC の代表幹事であった岡村さん（TN7 故人）は、明治丸の修復について大変心を砕いておられ、明治丸の一般公開が中止になった後も、屡々様子を見に大学に行かれていました。 そんな時、2 月になって大学に行ってみたら、解体工事が行われているのを発見し、直ちに同期の VC 幹事の豊村さん（KN4 故人）に状況を連絡し、2009 年（平成 21 年）2 月 10 日の朝、豊村さんから同じく幹事であった小生に状況の連絡がありました。 豊村さんと相談の結果、早速状況を見に大学に行こうと云うことになり、同日午後、大学に集合しました。

行ってみると、既にバウスピリット、フォアマスト、メインマストは、シュラウド部分を残し解体は終了しており、ミズンマストの解体中でありました。 明治丸左舷側には広く鉄板が敷かれ、クレーン車が脚を出して固定され、ヤード等を吊り下げて取り外す作業を行っていました。取り外された部位は芝の上に広げられたシートの上に累々と並べられていました。 驚いたことに、締め具が外れないからと云って、締め具の両端で木製のバウスピリット（ジブブーム）を切断し締め具の中に太鼓のように切断された残りが挟まっていました（次葉写真参照）。

訊いてみると、実際に工事を行っている下請け（孫請け）の業者は、ビルの解体業者で、明治丸が重要文化財であることも知らずに、ただただ、ビルの取り壊しと同様に「解体」していることが分かりました。 大学の担当者は何処にも見当たりませんでした。

（解体工事全景）

（両端を切断され、太鼓状に残ったジブブーム）

（取り外された部品）

調べてみると、既に解体されたフォアマスト、メインマスト関係でも切断されたものが散見され、出来る限り既存ものを修復して再取付けすることを基本とする、重文の解体工事としては如何なものかと思われる状況でした。また、解体されたものに名称の記載が無いものも散見されました。

（小間切れ状態のマスト類　等）

IHI 造船化工機の担当者と話をしたところ、重文であることは承知しているが、帆船の解体は初めてであり部品の名称についても、充分に分かっていないとのことでしたので、豊村さんと相談し、緊急事態と考えて、本来は大学が行うべきことではありますが、帆船の艤装に関する図書を貸すことにしました。また、解体したものの取扱いについては、保存や再使用の為に、きちんと名札を付けること、後々の為に寸法を測り記録すること、解体に際しては切断することは避けるべきこと等をアドバイスしました。

（ミズンロイヤルマストの取り外し）

（ミズンアッパートップヤード取り外し）

解体された明治丸の部位は、既に相当傷んでおり、再利用に耐えられる状況でないことは了解できますが、だからと言って、取り外した部品は重文の一部であり、然るべく保存されるべき性格のものであることに十分に配慮するのが、施主である大学、施工者である IHI 造船化工機の心得と考えます。 当時の状況から判断すると、両当事者共充分にその点を考慮して解体に臨んだとは考えにくく、翌年行われた船側外販と船底部分の修理工事にも相通じるものがあると考えます。

このようことが起こり、永年に亘り、明治丸の一般公開に協力してきたVCに対して、大学側からの情報の公開、VC との間の意思疎通、と云った点についての問題が表面化してきた為、明治丸の平成の大修理が本格化する前の、2010 年（平成 22 年）8 月から、この問題の解決を図る為、大学、海洋会、及び VC との間の「連絡協議会」が発足し情報交換の場ができました。

平成の大修理が終了して早や３年を迎え、そろそろ船体の各所の傷みが目に付くようになりました。　明治丸を今後 20 年間、良い状態で保つには、日頃の充分な点検と、発見された損傷個所の早期の手入れが不可欠と考えます。　日本海洋塾の一員としては、重文の所有者である大学が、文化財保護法の精神を十分に体現し、慎重に且つ柔軟に、また大胆に対処することを期待して已みません。

§長州ファイブあれこれ§　　正会員　澤間譲治

前号（６号）で長州ファイブの山尾庸三の生涯を紹介したが、その他の４人、伊藤博文、井上馨、井上勝、遠藤謹助のうち、今回は、鉄道の父と言われる『井上勝』について紹介したい。

【藩士の頃】

井上勝は、天保１４年（1843）8 月 1 日、萩城下町土原に生まれた。長州藩士井上与四郎勝行の三男で、幼名は「卯八」。父は長崎で役人を務め、その傍らオランダ人から西洋の兵学を学んだ。後に代官など長州藩の要職に就いた。勝はこの父の元で６歳まで育った。

６歳の時、野村家の養子になり「弥吉」と名乗った。とはいえ父勝行と野村家は親しかったので、父とはよく顔を合わせた。

１３歳になった勝は、相州警備隊長の役目に就く実父に連れられて本陣のある上宮田（横須賀市）へ行くことになった。相州では、自ら志願して、この仕事に就ていた伊藤博文と知り合った。博文は勝より２歳年上だった。翌年、父が相州警備の任務を解かれると、勝も一緒に萩へ戻った。

安政５年（1858）、１６歳の勝は、藩の命令でオランダ人より兵学を学ぶために長崎に行った。長州藩邸では実習訓練を受け、それが終わると、長崎西奉行所に行き、西洋の学問を学んだ。翌年６月、萩に帰ると、藩命で洋式の模範小隊を作り、その世話役となった。

安政６年（１８５９）江戸に出た勝は、幕府の番所調所で洋学を学んだ。しかしここで学ぶ内容は、父の影響で洋学に関心の高かった勝にとって、期待外れだった。そこで、藩主の許しを得て、函館の武田斐三郎の塾に行くことになった。

斐三郎は伊予大洲藩（愛媛県大洲市）の出身で、緒方洪庵に西洋の学問を学び、佐久間象山から洋式の兵学を学んでいた。外国の情勢にも詳しく、函館に奉行所が置かれると、その一員として任務に就いた。勝はこの塾で航海術や西洋の学問を学びながら、イギリス領事官員から英語を学んだ。

勝が萩に戻ったのは一年半後。しかし日本の情勢が大きく動く中、萩にじっとしている場合ではないと考え、そして養父と藩の許しを得て再び江戸に向かった。江戸麻布にある長州藩邸で、藩邸の仕事を手伝いながら、暇をみては横浜の外国人居留地を訪れ、英語の勉強をした。勝は、この頃から外国へ行きたいと思うようになっていった。

文久２年（１８６２）、長州藩は、藩としての考え方を「攘夷」に決定し、その準備を進めた。９月、長州藩は横浜のマセソン商会から蒸気船ランスフィールド号を購入して「壬戌丸」と名付けた。翌年（１８６３）２月には木製帆船ランリック号を購入し「癸亥丸」と名付けた。航海術を学んでいた勝が船長としてこの船を、品川から兵庫へ廻すように命じられ、この時、同じく航海術を学んでいた山尾庸三も測量方として乗り込んだ。無事兵庫に着いた勝と庸三は報告のために京に入った。

２１歳の勝、庸三、そして京にいた長州藩士井上馨の三人が、藩から外国へ行く許しを得たのはこの時だった。

【英国での勝】

勝は、ロンドン大学ユニバーシティー・カレッジに入学すると、「分析化学」を専攻した。分析化学は、地球上にある物質を化学実験で取り出し、その成分を明らかにしてゆく、化学の基礎となる学問である。これは、ウィリアムソン教授が担当する講義で、実験を中心とするものだった。勝は、この講義の他に、地質と鉱物に関する学問や物理を選んだ。

勝は最初、海軍の事を中心に学びながら、様々な事を吸収していこうと思っていたが、ロンドンの進んだ技術や文化を目のあたりにして、全てを学ぶことは到底不可能だと思わざるを得なかった。

井上馨と伊藤博文が、西洋の兵学、政治、経済を学ぼうとしたのに対して、勝たち三人は、工業を選んだ。５人が同じことを勉強するよりも、手分けして学ぶ方が、後に日本の発展に役立つと考えたからだった。勝の脳裏には、以前見学したパディントン駅など交通機関の発達ぶりが刻み込まれていた。日本にも鉄道が必要であると思い、鉄道と工業の原料を産出する鉱山を学ぶことに決めた。

勝は、専門を決めると、書物から学ぶだけではなく、マセソン商会支配人の紹介で、実際に鉄道や鉱山の現場に出かけ、ある時はシャベルを手に働きながら熱心に鉄道と鉱山について学んだ。こうして勝は優れた技術を身に付けていった。勝はこの時シャベルを手にした工夫姿の自分の写真を撮っており、後年、勝が生涯の記念として常に側に置き、苦しい時にはこれを取り出し、自らを励ましたと言われている。

ある日、ウィリアムソン教授は勝たちを工場見学に誘った。ロンドン郊外にあるベッドフォードの製鉄所と農業用機械の工場だった。そこで勝たちは、市長や市民あげての大歓迎を受けた。２人は工場見学の際、機械やその操作に関心を示したといわれる。

勝がイギリスに来て、すでに３年と言う歳月が経った。井上馨、伊藤博文、遠藤謹助は帰国し、勉学の資金は、すでに底をついていた。そのような１８６６年の秋、山尾庸三は、別のことを学ぶためにロンドンを離れた。１人ロンドンに残ることになった勝は、ウィリアムソン教授の手伝いをして、わずかな生活資金を得ながら勉学に励んだ。

その後軍事について学ぶため、イギリス義勇軍の小銃隊に入隊した。同じ頃、後からイギリスに来た長州藩士の１人が、飢えと疲労のため亡くなったことを耳にした。勝は、井上馨と伊藤博文に宛てて『これからは外国へ留学させるならば、先ず資金のことを考えて送り出すように』と、安易に人を送らないよう手紙を送った。
勝がイギリスに来て５年、日本では、徳川幕府が倒れ、新しい時代が始まろうとしていた。勝は長州藩の要職桂小五郎（木戸孝允）から、一通の手紙を受け取った。それには『早く日本に帰り、身に付けた知識や技術を役立てるように』と記してあった。

長州藩からの帰国命令により、１８６８年９月頃（慶応４年８月）、ロンドンに呼び戻された山尾庸三と共に帰国することになった。勝は、志を全うせず、途中で帰国することを残念に思った。全ての事を完璧に学んだ技術者として帰国したかったからだ。

勝がユニバーシティ・カレッジを卒業した時、その卒業証書に記された名前は『ミスター・ノムラン』となっていたらしい（密留学時の名は、野村弥吉であった）。勝は酒の呑める方で、お金に余裕があれば、留学して来た他藩の友人たちとよく呑み、日本の情勢について議論したと言われる。その友人たちは勝に『呑乱（ノムラン）』とニックネームを付けた。勝はこの呑乱を気に入り、自らもノムランと名乗った為、大学内でもこの名が通用するようになった。これがそのまま卒業証書に使われたのである。

【帰国後の勝】

井上勝と山尾庸三が横浜港に降り立ったのは明治元年（１８６８）１１月１９日だった。志を持って横浜の港を出てから５年半の歳月が経ち、勝は２６歳になっていた。日本では徳川幕府が倒れ、長州藩と薩摩藩が中心となり、新しい日本を作り始めたばかりだった。そのため、密留学の罪は問われなかった。

勝たちは、２１日、東京で新政府の要職に就いていた木戸孝允を訪ねた。孝允は、久し振りの再会を喜び、夜遅くまで語り合った。その後、勝は故郷、萩へ戻った。長州藩は勝の学んできたことを活かすため、明治２年（１８６９）の初めに、藩の鉱業管理の仕事に就かせた。しかし、孝允は勝と話しをした時から留学の成果を感じていて、勝の知識を地方に埋めておくのは勿体ないと考え、勝を新政府に呼び寄せた。長州藩もやむを得ずその要望に従った。勝は、１０月に東京に行き、伊藤博文の家に身を寄せた。博文は、イギリスから帰国して討幕で功績をあげ、新政府で重要な仕事をしていた。勝は大蔵省造幣頭（最高責任者）と民部省鉱山正（担当）に任命された。

１１月、イギリス公使パークスのすすめで、鉄道建設の会議が開かれた。出席者は、岩倉具視、大隈重信、伊藤博文と英語を完璧に話せた通訳の勝だった。そして新政府は、東京から京都、大阪、兵庫までの幹線と、東京・横浜間、琵琶湖・敦賀間の支線の建設を決定した。資金調達と技術者の派遣は、イギリスが行うことになった。

明治３年（１８７０）３月、東京・横浜間で測量が始まった。翌年鉄道寮（鉄道建設に携わる役所）がおかれると、勝は、鉱山頭兼鉄道頭に就任し、工事責任者として直接鉄道建設に携わることになった。２９歳で勝の『鉄道人生』が始まった訳である。

明治５年（１８７２）から建設された鉄道は、明治３９年（１９０６）には、五千哩（約８０００㎞）を超えていた。それを記念して、名古屋で『鉄道５千哩祝賀会』が催され、大隈重信、伊藤博文と共に勝は、鉄道建設に於ける功績をたたえられ表彰された。

明治４２年（１９０９）１２月、鉄道院総裁から、勝は鉄道院顧問に命じられ、ヨーロッパの視察に出掛ける話が決まった。勝の家族や親戚の者は、病気を心配してヨーロッパへ行く事に反対したといわれる。しかし勝の決心は変わらなかった。

明治４３年（１９１０）５月、６８歳の勝は、東京から鉄道を使いながら長崎まで行き、そこから大連行きの船に乗った。大連から南満州鉄道、シベリヤ鉄道と乗り継ぎ、ヨーロッパに着いたのは約半月後だった。そして先ずはイギリスへ渡りロンドンに入った。

ロンドンは、５０年前、志を抱いて密留学をした地だった。勝は、かつての恩人ウィリアムソン教授の家を訪ねた。教授は既に亡くなっていたが、夫人は、勝を我が子のように迎えてくれた。夫人は勝の顔色を見て、健康状態を心配したが、勝は無理を押して一か月のヨーロッパ視察に出掛けた。そして、再びロンドンに戻って１０日も経たない８月２日、勝は息を引き取った。死の間際まで、日本の鉄道発展のために力を尽くした人生だった。仮葬儀は、初めて鉄道に出会ったこの地で、ウィリアムソン夫人やイギリスにいた日本人の手でしめやかに行われた。

井上勝は鉄道を敷くために生まれて来たと言っても過言ではなかった。鉄道建設の反対にあいながら、命をはって鉄道の基礎を築いた。勝が『鉄道の父』と呼ばれる所以である。

勝は、現在、鉄道に挟まれた、品川東海寺大山墓地で鉄道の発展を願い見守っている。

特定非営利活動法人　日本海洋塾
＜NPO　Meijimaru　Memorial　Academy＞
事務所：〒135－8533東京都江東区越中島2－1－6
東京海洋大学越中島会館2F
TEL：03-6458-5272
FAX：03-6458-5272
E-Mail：kaiyojuku5122@train.ocn.ne.jp
ホームページURL：http://kaiyou-juku.org